

高校生の家族の機能と学校適応感の関連について

— 動的家族画を用いた検討 —

○奈須野玲加・石田 弓

(広島大学大学院教育学研究科)

目的

家族には、様々な機能があると考えられているが、その機能が不十分であるような家族の中で育つ子どもは、自我発達と社会適応上の問題を招くとされる。横山・久保田・古田 (2011) では、家族機能と中学生の学校適応感との間に正の相関が見出されており、青年期における家族機能と学校適応感の関連を明らかにすることが、学校適応上の問題を生じさせる生徒の家族への介入の一助にもなると考えられる。そこで本研究では、高校生の家族機能と学校適応感の関連を明らかにするため、質問紙法による調査を行う。質問紙法には、集団に対して実施できる、採点が容易で客観的であるといった利点がある一方、項目が具体的であることから、回答を意図的に歪めることが可能であるといった問題点もある。このような問題点を補うために動的家族描画法 (KFD) を用い、KFD が家族機能と学校適応感に問題を抱える高校生をスクリーニングするのに有用であるかを検討する。

方法

調査対象者 広島県内の高校 2 校に通う生徒 1~3 年生 172 名を対象とした。

質問紙 家族機能測定尺度 (立山, 2005), 学校適応感尺度 (石田, 2009) を用いた。

KFD Burns & Kaufman (1970, 1972) によって開発された描画法であり、「あなたを含めて、家族全員について、何かしているところを描いてください」という教示を用いた。

手続き 調査はクラス単位で実施した。まず、KFD を実施し、絵に関する質問 (描いた絵の説明・会話の内容の記述) に回答させた。その後、質問紙に回答させ、性別、学年、家族構成を記入させた。

結果と考察

家族機能と学校適応感の関連 家族機能測定尺度と学校適応感尺度の相関分析を行った結果、中程度の正の相関が見られた ($r=.502, p<.01$)。このことより、家族機能が適応的に機能している生徒では学校適応感も良いことが明らかとなった。

全体的印象分析 筆者らと心理学専攻の大学院生 3 名に KFD 印象評定尺度 (大和田・阪, 2007) を用いて KFD を評定させ、5 名の評定値の平均点を評定値として採用した。家族機能得点によって分けた 3 群間 (バランス群, 中間群, 極端群) の得点の違いを検討するために分散分析を行った結果、有意な差は見られなかった。しかし、散布図を確認したところ、家族機能得点は高く、KFD 印象評定得点は低い値を示す調査対象者が約 2 割いることが明らかとなり、質問紙に示されない無意識水準の家族関係の問題が KFD に示される可能性があると考えられる。

形式分析 筆者らで、描画の「様式」の有無の検討を行った。家族機能得点によって分けた 3 群間の各様式の出現数の違いを検討するために χ^2 検定を行った結果、「区分」では、極端群が有意に多かった ($\chi^2=6.401, p<.05$)。「包囲」では、バランス群が有意に少なく、極端群が有意に多かった ($\chi^2=6.603, p<.05$)。「下部の線」では、バランス群が有意に多かった ($\chi^2=4.598, p<.05$)。これらのことより、「区分」、「包囲」、「下部の線」は、生徒が無意識的に抱える家族機能の問題をアセスメントに役立つ可能性がある。

内容分析 内容分析の指標として、行動の内容を用い、筆者らと心理学専攻の大学院生 1 名で検討を行った。まず、同/別行動の基準によって分類し、これをさらに活動/会話の基準によって分類した。その後、「交流あり」、「交流なし」に分け、「交流あり」のカテゴリにおいては、交流が「協力的」か「衝突的」かによって分けた。家族機能得点によって分けた 3 群間の各カテゴリの出現数の違いを検討するために χ^2 検定を行った結果、同/別行動カテゴリでは、極端群の「同行動」が有意に少なく、「別行動」が有意に多かった ($\chi^2=6.810, p<.05$)。家族が別行動をしている KFD を描く生徒の家族機能に問題がある可能性が示唆されたことより、KFD に描かれた家族の行動が同じか別かを見ることによって、生徒が無意識的に体感している家族機能に問題があるかどうかをアセスメントすることができると考えられる。